



## 利他の心

教育学部長  
教育学科教授

### 島田 和幸

四天王寺学園には、大学・高校に隣接した職員宿舍脇に実習農園があり、ここで野菜や花の栽培ができる。現在は、四天王寺羽曳丘高校の管理下でこの一画の百坪程度の畑を借用し、栽培活動を行っている。

昨年の 11 月から私が学生と一緒に取り組んでいるのは、花と野菜が調和した畑、ポタジェである。正式には、ジャルダン・ポタジェ (jardin potager) と言うらしい。野菜だけでも花だけでもなく、この両者が調和した「菜花園」のことである。ここでは、手始めに玉葱を有機農法で栽培し、その周囲にパンジー、ノースポール、男爵イモ等を植え付けた。ほかに、カモミールやクールミント等のハーブ、カサブランカ、マリーゴールド、グ

ラジオラス等の花やスイカ、ナス、カボチャなどを、ポタジェサークルや島田ゼミの学生と一緒に育てている。

『当世書生気質』は、坪内逍遙が明治時代の学生の生活や気質を軽快な七五調で描写した小説である。しかし、本学の学生気質は、芸者遊びをする当時の書生とは全く異なる。畑仕事の後、私は、学生達を車に乗せて食事に連れて行ったり、スーパーで弁当を買い与えたりしていた。ところが、そんなことが何回か続くと、次第に参加する学生の数が少なくなり、ついには誰も来なくなった。学生の奉仕の心を掻き乱したことに気付いた私は方針を変え、参加した学生に職員宿舍の我が家で、農園で取れたカモミールやクールミントのお茶を出したり、作物の収穫後には、ジャガイモや玉葱を持ち帰らせたりすることにした。悲田院保育園の園児らに収穫した作物を持参して手渡させた時の学生の嬉しそうなお表情も忘れられない。「利他の心」が大切だったのである。



## 眼施、和顔施の勧め

人文社会学部 国際キャリア学科専任講師

### 奥羽 充規

四天王寺大学の学内で、時折とても気持ちの良い笑顔で挨拶してくれる学生を目にします。その際に「ああ、和の心を実践している学生だな」と嬉しく思いながら、ふと私が以前に巡った四国遍路を思い出すことがあります。

四国遍路とは真言宗の開祖、弘法大師ゆかりの札所のお寺を巡る遍路です。その行程では、四国全体の地を霊場としてとらえ、札所を巡拝しながら、その土地に深く根ざした信仰の姿に触れ、道中修行することに意義があります。

その修行の 1 つとして誰にでもすぐに行うことができるのが、お金のかからない施しである「無財七施の修行」です。中でも眼施（優しい眼差しを向ける）や和顔施（いつも笑顔で絶やさず）などは比較的行うがしやすい修行で

す。四国遍路には、お遍路の導き手である先達という存在があり、無財七施を始めとした遍路修行の在り方を体現しています。

四国を巡っている間、私も多くの先達さんにお会いし様々な教えを得ました。中でも、90 歳を超えたご高齢の先達のお婆さんにお会いして挨拶を交わした際に、この方から向けられた眼施、和顔施に心を揺さぶられたことを今でもはっきりと覚えています。「こんにちは」と顔を合わせて挨拶を交わすれ違っただけの一瞬の出会いでしたが、「まさに私の笑顔」と思われるほどに心が癒され、遍路で疲れ切った私の顔が笑顔に変わり、かつ自分の未熟さを実感させられました。そして同時に、気持ちのよいくらいにすがすがしい敗北感も味わたったのです。それは私の人生で得られた大きな施しであったと思います。

笑顔は自分が楽しいからだけではなく、周りの人たちに施すためにも出す。それもまた四天王寺大学の和の心の実践にあたるのではないのでしょうか。眼施や和顔施を通して、大学内がより和で満ち溢れる場であれば素敵ですよ。

## ❖ 「和のこころを世界へ」

四天王寺大学学長

岩尾 洋



平成 29 年（2017）3 月に行われた学位授与式において、学校法人四天王寺学園理事長・瀧藤尊淳先生からのご祝辞の中に、私見ですがとして「なぜ聖徳太子は十七条憲法の第一条に、和を以て貴しと為すと記されたのか」とのお話がありました。王権を取り巻く当時の政治社会情勢は、蘇我氏と物部氏がそれぞれの天皇候補者を立てて血で血を洗う権力闘争をしていた時代です（丁未の乱）。さらに、従来の神道的な考えに加えて新たに仏教を導入しようとする時期でもあり、思想的な混乱と権力抗争とが相まった政治社会情勢の上に、疫病の流行や飢饉も重なり世の中は不安定であったと考えられます。そのような倭国の情勢の中で聖徳太子が考えられたことではないかとのお話でした。私もこの原稿を依頼されてから同じように考えてきました。出典は、孔子の『論語』学而篇の「有子曰く、礼は之れ和を用て貴しと為す（有子曰、礼之用和為貴）」に基づくと考えられているようです。当時の中国から伝来してきた儒教、法家、老荘などの諸子百家や仏教の思想の中心に「和」はありませんでした。なぜ十七条憲法が一番最初に「和」を持ってきたのか。当時として、とても重要な意味と必然性があったのだと考えられます。

「和を以て貴しと為す」の解釈は時代により変わってきたようです。もともとは官吏の心得として作られたようです。第二次大戦中は、国民が一致和合して戦い抜くことと捉えられていたようです。戦後は、民主主義と平和主義の考えのもとに解釈されています。和を用いた熟語は多く、平和、調和、和気、和解、和議、和合などの相互関係の安定を示す意味、和算などの加える意味、和紙、和歌、和食、和学、和菓子、和裁、和室、和洋などの日本を表す意味などがあります。その中の相互関係の安定が、学園訓の和ではないでしょうか。相互関係の安定とは、均一ではない異質な人の集団・物の集合の安定化です。私たちの生活している環境を考えると自分と同一の人・物は存在しな

い世界に生きています。言い換えれば、自分とは異なる多様な人・異質な物に囲まれて生きていくことになります。このような中で生きていくには、色々な人・物との調和が必要となります。

人との和について考えてみます。異質な人を受け入れる時は、相手のことをよく知る必要があります。では何を知ればよいのか。集団であれば、その集団の言葉、文化、習慣、仕来たり、制度、宗教、考え方などを知り理解することは最低限必要でしょう。とても大変なことです。1990 年ころから英米国が中心になり推進されてきたグローバリゼーションの波に日本も飲み込まれ、程度の差はあるものの人、物、金・資本、情報が国境を越えて自由に移動し交流・流通が容易になりました。しかし、シリア難民に端を発した E U の移民・難民受け入れは、英国の E U からの離脱、トランプ氏の米国大統領就任、フランス大統領選挙へと波紋を広げ、グローバリゼーションに陰りが出てきています。人の移動には言葉、習慣、宗教や文化がついて回ります。日本は周囲を海に囲まれていて人の移動には大きな制約があることから E U 諸国とは異なります。また、米国のように多くの移民が集まってくるわけではありません。昔から海を隔てた国々から多くの人、知識や文化を取り入れ、自分たちに合うように消化してきた我々の先祖に倣い今後もグローバル化は進むことでしょう。その中で、やはり重要なことは他者を思いやる心へのどの程度持っているかということではないでしょうか。

自分が異質なものの中に入り込む時、これは非常に困難な状況が多いと思います。海外の学校などに留学した時、新しい学校に入学した時、転校で新しい学校に初めて登校した時、新入社員として就職した時など、すでに多くを体験していることでしょう。新しい環境の中で相手を尊敬し、心を開き、受け入れること、それには周囲に働きかけるコミュニケーション能力が重要です。このような中で重要なことは、自己のアイデンティティを持つことではないでしょうか。さらに、自分はその集団の中で何ができるか。何によって貢献できるのか。自分にしかできないことが見つければ素晴らしいことです。本学で学んだ諸君は、「和して同ぜず」という諺にあるように、人と協調はするが、主体性・アイデンティティを失うことなく自利利他の精神をもつことによって、集団の中で和していくことが出来るのではないのでしょうか。

### ウパーヤ学生編集員を募集しています

こんにちは。日本学科 3 回生の川口泰幸です。現在「ウパーヤ」では、紙面作りに参加してくれる学生編集員を募集しています。学部・学科を問わず、仏教・寺院・仏像・歴史などに興味がある方、また取材や執筆活動に関心がある方ならどなたでも歓迎します。

私はこれまで学生編集員として「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材を 3 度経験しました。現地へ赴いて聞いたお話やそこにあるモノに触れることで得られる知識・発見は計り知れない程多く、いつも行って良かったと感じています。さらに、取材した内容を本誌やホームページ

記事にまとめることで知識の整理ができ、興味をもって読んでもらえる文章作成など、自分自身のスキルアップにもつながります。

このような活動がしてみたいという方、ぜひ私たちと一緒にやってみませんか。少しでも迷ったら一度挑戦してみるのが一番です。興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第 4 面下に記載されているメールアドレスにメールもしくは仏教文化研究所の研究員にお声掛けください。ご連絡お待ちしております。

（学生編集員：川口泰幸）

## 第 11 回 卒業生インタビュー

話し手：上野 舞斗（うえの まいと） 和歌山大学大学院修士課程 2 年生

平成 28 年 3 月 教育学部教育学科中学校英語・小学校コース卒業

聞き手：坂本 光徳（仏教 I・II 講師、人間福祉学科健康福祉専攻専任講師、本欄編集）

### 現在の活動について

私は 2016 年に教育学部中学校英語・小学校コースを卒業して、和歌山大学の大学院に進学しました。現在はほぼ毎日大学院に通っていますが、火曜日は四天王寺大学にリメディアル教員として毎週来ています。大学院では、英語教育の歴史について研究をしています。英語教育に関わる人は未来ばかりを向いて、過去を省みないことが多いように思いますが、昨今ではやされている小学校英語や「授業は英語で」などといったことは既に戦前に議論されていることです。その中で多くの試行錯誤がなされていますが、実はそこから何も学んでないことが多いのです。もう一度同じ轍を踏まないようにすることが、歴史を学ぶおもしろさとなります。もともと高校生の時は日本史の教員になりたかったのですが、志望の国立大学に落ちて、それなら苦手な英語の教員になろうと入学したのが四天王寺大学でした。そうしたことから、日本史と英語の両者が融合した「英語教育史」を研究しているのかもしれませんが、大学では、今まで勉強としていた暗記ものの根底には理屈があることを知り、そこで学びというものとは人から押し付けられるものではなく自分で獲得していくものということに気づきました。そこに学びの面白さを感じ、研究の道を志すきっかけとなりました。今も博士課程に進学するか、就職するか考える時期ですが、どちらにせよ研究を続けたいと考えています。

### 礼拝の時間について

実は四天王寺に対してご縁があったと考えています。私は 4 歳位の時に何故か般若心経を唱えていたそうです。家が敬虔な仏教徒というわけではありませんが、私が初めて書いた漢字が「上野家先祖代々之霊」だったそうです。小、中学生の時は仏像が好きで寺社仏閣や西国三十三所を巡っていました。中学時代の後半から高校にかけては興味も薄れていきましたが、入学したのが四天王寺大学であったことにはやはり縁を感じています。ですから礼拝の時間に関しても暇だとか苦痛だと感じる事はありませんでした。もちろん普段の日常生活で自分 1 人になって考えることもあります。実際に 2、30 分を与えられてその中で瞑想や写経をして本当の意味で自分を見つめ直す。見つめ直すに至らなくても、レポート作成など以外にも本当に集中できる機会でしたので、気持ちの整理などが出来て、礼拝が終わった時には心の引っぱりが取れていました。仏教を学ぶ以外にも心のバランスをとる良い機会でした。周囲が騒がしくすることに、不満を感じる事もありましたが、そのようなことを思う自分も未熟であると思いましたし、試練を与えてくださっていると考えていました。写経については、幼い頃が蘇るようで、懐かしく感じていました。幼児や小学生の時に写経をしていて、そこで漢字を覚えたようなものでした。しかし大学で写経をすることで、一字一字書くときに語句の意味を考えるようになるなど、字に対する意識が変わりました。それは現在の英語教育に関する研究にも生かされています。

### 学園訓について

学生時代から、もっともだと思っていましたが、今改めて読み直すと新たな気づきを得られます。「誠実」については、ただ単に正直であれば良いように当時は考えていました。しかし単に正直という意味ではなく、真心であったり、一つ一つのことに心をこめたりすることが必要であることを示しているようにも今では感じられます。「健康」もまた大切です。自分は大学院生ですが、現在教師で活躍している同級生の話や聞くと、いくら仕事ができても体を壊して周りに迷惑をかける何の意味もないと気づかされます。やはり体が資本です。学部一年生の時は、なかなか健康が大切だという意識にならないと思いますが、年齢や立場が変わることで考えも変化します。在学中、学園訓は、間違ったことは言っていないという程度の認識でしたが、卒業して再度見ると更に納得いくことも多く、その深さを身をもって感じているところです。



### 在学生へのアドバイス

私のモットーは、「よく遊びよく学べ」です。「よく学びよく遊べ」とは異なります。思いっきり遊ばないと思いきり勉強できないと考えています。そのような意味では、後輩の皆さんには思いっきり遊んでほしいです。また遊びすぎると、逆に遊んでいる（楽しい）と自分で認識できなくなります。だから学びがあるから遊びもあると気づきます。そして遊びの中に学びが、学びの中に遊びがあることにも気づくことができます。また、仲間の大切さを意識してください。大学の友達は、在籍期間のつながりだけではありません。自分一人では人間は意志が弱いものですから、なかなか勉強できないこともあります。それを仲間が支えてくれ、また自分も仲間を支え、お互いに支えあいます。学習以外でも日ごろの悩みを相談し支えあうこともできます。それが仲間の強みだと考えます。現在リメディアル教員として活動していく中で考えるのが、教え方以上に仲間の力が偉大であることについてです。ですので、仲間同士の結びつきにどのように繋げていくかを考えています。自分も一年生の頃から、同じ学科で勉強会などに参加して、お互いに支えあっていました。振り返るとそのように先生方が指導してくださっていたのかと思います。仲間との協力は、和の精神や利他の精神に繋がってきます。自分を犠牲にして人に尽くすとは、当時は考えていませんでしたが、結果的にそのようなになっていたこともありました。利他の精神と言うと構えることもあります。しかし自己満足だけでも結果的に人助けに繋がったり、自分一人で作るのなら皆と一緒にやろうと考えたりすると実践できるのではないのでしょうか。

## 平成 29 年度 夏学期「仏教 I」講話題目

- 4 月 6 日 杉中 康平先生「受講ころえー授業規律に関して」  
坂本 光徳先生「礼拝説明」
- 4 月 13 日 学長 岩尾 洋先生「建学の精神—「ころえ手帳」に寄せて」  
坂本 光徳先生「授戒会オリエンテーション」
- 4 月 20 日 坂本 光徳先生「瞑想—心を整える楽しみ—」  
伊達 由実先生「大学生生活の心得」
- 4 月 27 日 藤谷 厚生先生「四弘誓願文・懺悔文—限りなき願い・懺悔の心—」
- 5 月 11 日 拜田 清先生、中村 佳恵氏（株式会社進研アド）  
「学生の海外活動について①—海外留学・語学研修について—」
- 5 月 18 日 矢羽野 隆男先生「学園訓について—和について—」  
笠原 一哉先生 & 学生（阿児 和博）  
「学生の海外活動について②— My Life in California —」

- 5 月 25 日 石田 陽子先生「歌うことは聴くこと—なぜ私たちは聖歌を歌うのか?—」  
恵木 徹待先生 & 学生（安村 あゆみ、松原 未来、飯屋 小春、宮里 芹奈）  
「学生の海外活動について③—ラオス・インターンシップ・プログラム—」
- 6 月 1 日 成田 由岐子先生（弁護士）「学生生活に潜むリスク—犯罪・トラブルを回避するために知っておかなければならないこと—」
- 6 月 8 日 南谷 美保先生「仏像を知ろう—仏様に会いに行くとは?—」
- 6 月 15 日 藤谷 厚生先生「学園訓について—四恩について—」
- 6 月 22 日 上績 宏道先生「開経偈—出会い（縁）の不思議—」
- 6 月 29 日 南谷 美保先生「四天王寺の聖霊会とは? 天王寺舞楽について知ろう」
- 7 月 6 日 坂本 光徳先生「般若心経—空の教えから学ぶ—」
- 7 月 13 日 源 健一郎先生「回向文—私のためはあなたのため、あなたのためは私のため—」
- 7 月 20 日 杉中 康平先生「夏学期を終えるにあたって」

## 聖徳太子ゆかりの地をめぐる

### 一大安寺（奈良県奈良市）一

今回訪れたのは、奈良市の中心部にたたずむ大安寺だいいんじです。今では「がん封じ」が行われるお寺としてたくさんの人々が訪れていますが、仏教の根幹を担っていたお寺だと知っている人は少ないのではないのでしょうか。

日本は奈良時代、都が平城京であったことはみなさんご存じだと思います。平城京およびその周辺には、南都七大寺という、朝廷から保護を受けた七つのお寺が存在しました。そのうちのひとつが大安寺です。なおかつ、一番大きなお寺でした。

そんな大安寺ですが、私自身が実際に訪れてみた感想としては、「こじんまりしている」でした。そこで、当時の境内、それから伽藍の配置を示した図がパネルに掲示されていたので、現在の地図と照らし合わせてみます。すると、境内は当時よりもかなり狭くなり、かつて伽藍があったはずの場所には小学校や、訪れる際に横切った民家が建てられていることが分かりました。戦後、ある程度は復興されたそうですが、現在の境内は当時の25分の1しか残っていません。あまりの廃れっぷりから、かの文豪・森鴎外



は、娘にあてた手紙に「今日は廃寺に行ってきた」とつづったほど。

聖徳太子が建てた熊擬精舎くまごりしょうじやが移転や改称を繰り返して、霊龜2年（716年）に平城京内に建てられたのが、大安寺です。当時、大安寺には887人の僧侶が居住していたという記録もあり、弘法大師の名で知られる真言宗の開祖・空海や、天台宗の開祖・最澄もこの大安寺で学んだとされています。他にも国内外から僧が集

て学んでいた、いわば総合大学と言えるでしょう。また、海外からの政府高官、学者、文化人たちが日本に訪れた際に逗留（しばらく滞在すること）する迎賓館でもありました。つまり、大安寺は仏教文化の発展地のみならず、さまざまな情報の発信地でもあったのです。



『日本霊異記』（正式名称は『日本国現報善惡霊異記』）には、大安寺に関連した説話がいくつか書かれています。まずひとつは、無実の罪で捕えられた人々が大安寺の仏さまに祈ったところ、無事に解放されたというお話。同じく、貧しい女性が供え物を持って毎日大安寺に訪れ祈ったところ、家に金銭が届いたというものもあります。大安寺にある仏像はよく願いをかなえてくれると評判で、民衆から慕われていたことが分かるお話です。また、こんな面白いお話もあります。商人の男が地獄から来た鬼に追いかけられるが、鬼が腹をすかしていたためごちそうをふるまったところ、鬼は男を許した。しかし、男を許すと鬼が地獄の閻魔に叱られてしまうため、大安寺の僧が二日間かけてお経を百回読み、閻魔は鬼を許した…このお話は、大安寺そのものが人々から尊敬され、頼られるお寺であったことを示しています。大安寺は、僧や貴族のためだけでなく、民衆のためにも存在していたのです。

四天王寺大学は、かつての大安寺に似ています。多くの学生が仏教について学び、そして未来に繋げていくととても有意義な場所だと私は感じています。当時の地図を頼りに、私たちのようにひとつの場所に集っていた人々に想いを馳せながら境内や周辺を巡ってみれば、改めて仏教を学ぶことの大切さに気づけるかもしれません。

（学生編集員：三宅亜季）

## 仏教のことば

### 無常

仏教には「無常」という言葉があります。この無常は、サンスクリット語の Anitya（アニッチャ）の訳語ですが、漢字の意味からも分かるように「常では無い」ということです。つまり、あらゆる存在は生滅変化して移り変わり、何一つとして同じ状態には止まっていないことを意味します。よく「諸行無常」であるとか、「無常迅速」などと言われます。諸行とは一切の現象を指し、この世のすべての現象は、一瞬たりとも停

止することなく、常ならずして生滅変化していくというのが、諸行無常の意味です。しかも、その変化し移り変わる様は、あつという間で誰も止めることはできません。大学での数年の学生生活も、あつという間に過ぎ去ってしまいます。実にこの世は無常で迅速なのです。

この無常を感じることは、私たちの持つ宗教心と極めて深いつながりがあります。お釈迦さまはインドの王族の出身でした。何不自由な生活をしていたお釈迦さまでしたが、地位も名誉も財産も、すべて永遠にある訳ではなく、自らの身体もやがては老い朽ちて、死んでいかなばならぬことを痛感されます。そして世の無常を悟り、すべてを捨てて出家し、真の心の平安を求めて、艱難辛苦のご修行の末に、仏陀となられたのでした。まさに、無常を感じることに、仏の道への第一歩となった訳です。（藤谷厚生）

## 編集後記

今号は巻頭エッセイとして、教育学部長の島田先生から「利他の心」、国際キャリア学科の奥羽先生から「眼施、和順施の勧め」、第2面では学長の岩尾先生から「和のこころを世界へ」をテーマにそれぞれ執筆頂きました。第3面の卒業生インタビューでは、教育学科中英・小学校コース卒で和歌山大学大学院生の上野さんから、子ども時代の貴重な体験を交えた在学時の思い出話や在学生へのアドバイスをお話し頂きました。いずれも自己の在り方や生き方にとって大切なことを教えて下さるお話です。大安寺にも是非お参りしてみてください。次号もご期待下さい。

(H.U)

### 研究員紹介

所長 岩尾 洋(学長・教授)  
主任研究員 矢羽野 隆男(教授)  
研究員 上續 宏道(教授)  
藤谷 厚生(教授)  
源 健一郎(教授)  
南谷 美保(教授)  
杉中 康平(准教授)  
奥羽 充規(専任講師)  
坂本 光徳(専任講師)  
中田 貴真(専任講師)  
南谷 惠敬(客員教授)  
桃尾 幸順(客員研究員)

### UPĀYA (ウパーヤ) 11号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成29年9月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前三丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611

URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPĀYA(ウパーヤ)」に関する  
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。

E-mail bukken@shitennoji.ac.jp

(件名は「ウパーヤ」としてください)

